

高層ビルやマンションが立ち並ぶ東京都心に7月上旬、本格的なバーベキュー（BBQ）施設がオープンした。地下鉄豊洲駅（江東区）から徒歩約5分の埋め立て地に広がる「ワイルドマジック」だ。東京スカイツリーや東京タワーを眺めながら手ぶらでBBQを楽しめるとあって、昼は家族連れ、夜は若者や会社員らで連日にぎわう。

「こんな近くでアウトドアを満喫できるなんて」と驚くのは

旬
すぽっと



スカイツリー眺めバーベキュー

同区に住む主婦、佐保田万智子さん（31）。保育園つながりのママ友を中心に6家族20人で来場した。子どもたちは芝生を走り回り、お父さんたちは生ビール片手に談笑。「都心だと渋滞もなく、小さな子供を持つ母親としてはうれしい」

午前11時～午後4時と午後5時～10時の2部制。1区画100平方メートル超の広いスペースで、薫製肉やローストチキンなどの食材や、米国製の本格的な調理器具など機材類一式が付いて1人4500円（中学生以上）。

小学生以下は無料だ。太陽が照りつけた前週末は予約枠いっぱい。1日800人が訪れた。

今後5年間、冬も営業する。

運営する商業施設企画会社、スパープロジェクト（大阪市）の原田康弘エグゼクティブプロデューサーは「家族の絆が見直されている今、青空の下でじっくりと薫製を仕上げながら時間を過ごしてほしい」と話す。

大自然の中で重装備…のイメージがあった「キャンプ」が都会でカジュアル化してきた。臨海副都心のキャンプ場が、子連れのママや会社帰りのサラリーマンらでにぎわう一方、駅ビル屋上のバーベキュー場も盛況だ。武骨なアウトドア用品も軽量小型化とオシャレ化が進み、自宅で普段使いできるグッズが増加。野外体験の裾野を広げている。
(重松明子、写真も)

都会型キャンプ

身近な野外体験



臨海副都心、ゆりかもめ新豊洲駅前のキャンプ場でバーベキューを楽しむグループ。近場ならではの赤ちゃん連れだ
「江東区「ワイルドマジック」

は、今夏初めてバーベキュー場形式で営業。今月29日までだが、「9月に入ってから連日満席」(同店)と大盛況が続く。アウトドア用品市場も拡大中だ。矢野経済研究所では、3年前1425億円だった国内市場が今年1740億円に達すると予測している。

業界大手のコールマンジャパン、根本昌幸マーケティングディレクター(48)は、「防災用品としての震災特需や都内でもバーベキューができる公園が増えたことが好調の背景。車を持たない方や集合住宅など、今時の都市生活者に合ったコンパクトでスタイリッシュで汎用性の高い商品の開発に力を入れています」。購買層の中心は20〜30代前半。野外の音楽フェスに親しんだ世代が子供を持ち始め、アウトドアへの興味を高めているという。「とはいえ、モノを持たない、欲しがらない世代。自らネットで情報を集め、身の丈とセンスに合う商品を厳選している。僕らの世代の四輪駆動車で、店員に勧められるまま高性能の道具一式…という具合にはいきません」と苦笑した。

同社の展示会に足を運ぶと、ピンクや黄色、グリーンなどのポップな商品が目を引く。「外ごはん」を提案するコンパクトなテーブルとクッションのセット。カラフルな寝袋は、部屋での防寒や来客時の布団代わりに。アウトドアチェアを普段は家具として使って収納問題をクリア…など、上手に生活に取り入れる人が増えているそう。現在、ビームス、タワレコ、アフタヌーンティーなど6ブランドとコラボ。多様な業界が野外との親和性を探っている。

ようやく暑さも和らいできた。身近なキャンプ場で、都会の秋空をのんびり眺めてみるのもいい。

近ごろ都に流行るもの

臨海副都心を走るゆりかもめ車窓から見える、ビルの谷間のテント群。新豊洲駅前の運河沿いに広がるキャンプ場「ワイルドマジック」だ。昨年7月にオープン。アメリカンビンテージをイメージした野外空間に、バーベキューだけで約5000人を収容。8つの宿泊テントとともに、週末は10月中旬まで予約で満杯という人気ぶりだ。

「車の乗り入れもできますが、昼はベビーカーを押した近隣の母親、夜は仕事帰りのグループがタクシーで乗り付けるなど、従来のキャンプ場にはない都心ならではの利用が目立ちます」と広報の佐藤正児さん

オシャレなコールマンの女性用寝袋(4410円)。暖房費節約や簡易布団として、自宅でも違和感なく使える



この土地は平成12年まで都の石炭埠頭。その後の土地整備事業で東京ガス所有となり、遊休地約1・6畝が賃貸活用されている。通年営業で、寒くなる秋冬もハロウィーンやクリスマスイルミネーションで盛り上げるそう。

一方、JR池袋駅ビルのルミネ屋上「ザ・ルーフトップ」